

シキーニャ・ゴンザーガー ブラジル大衆音楽の母

住田育法

はじめに

シキーニャの愛称で知られるフランシスカ・エディヴィージェス・ネーヴェス・ゴンザーガーは、ブラジル独立から4半世紀後の1847年10月17日に帝国の首都リオ・デ・ジャネイロ（以下、リオと記す）に生まれ、ヴァルガス革命5年目の1935年2月28日に、同じくこの首都リオで一生を終えた。その87年の生涯は、政治的独立を果たした直後のブラジルが、ヨーロッパとは違う固有の文化を求めて苦悩し、やがて誇りを獲得することになるブラジルの近代国家形成期に重なっている。彼女は、ヨーロッパの洗練された音楽の伝統と、ブラジル黒人のダイナミックな民族音楽を融合させた、ブラジル大衆音楽（*Música Popular Brasileira*）創始者の1人として、首都リオを舞台に、華々しく活躍した。

女性としては、離婚や子供との別離などに苦しみながらも、自由で、絶えず男性をひきつける魅力にあふれ、音楽家としては、最高レベルの権威と、庶民の誰からも愛される人気をあわせ持つという幸運に恵まれた生涯であった。

小さな音楽家

1822年の独立から89年までの70年ちかい王国としての経験が、広大なブラジルをスペイン系ラテンアメリカのように、複数の国に分離させることを阻止した。ブラジルの名を冠する文化の受け皿の完成である。

摂政皇太子ペドロ1世は独立によって皇帝と呼ばれ、この存在が国民をまとめる求心力となり、1840年に帝位についたブラジル生まれのペドロ2世によって、その力はさらに強まった。このペドロ2世の時代に、帝国陸軍旅団長フェリシアーノ・ジョゼー・ネーヴェス・ゴンザーガーの孫、陸軍中尉ジョゼー・バジレウの子という由緒ある軍人の家柄の7人兄弟姉妹の長女としてシキーニャは生まれ、豊かで恵まれた家庭環境の中で育った。

母親はローザ・マリーア・デ・リマという黒人の血の入った貧しい混血女性であった。しかし、父親が正式に子としての認知を行い、母親とともに幸せな幼年期を送ることができた。リオの中心街の館に住み、妹や弟とともによく学びよく遊んだ。日曜日には、ミサの後、館のそばのパセーイオ・プブリコ庭園で吹奏楽団の演奏をよく聴いていた。

やがてカトリックの神父が、家庭教師として、国語であるポルトガル語や外国語のフランス語、ラテン語、歴史地理などをシキーニャに教え始める。父親はそのとき、オーケストラの指揮者と契約して、彼女にピアノを正式に学ばせた。さらに、館を日常的に訪問する伯父であり名付け親でもあるフルート奏者のアントーニオ・エリゼウが、いろいろな音楽情報を彼女のもとに運んできた。

若きピアニストのシキーニャは、11歳になった1858年のクリスマスのパーティーのとき、伯父エリゼウの指導で、生涯を通じて発表した2千を超える音楽作品の最初の1曲を披露したのである。それは、妹ジュカの詩「羊飼いの歌」に曲をつけたものであった。小

さな音楽家の誕生である。

文化の都リオ

シキーニャのふるさとリオについて少し述べてみたい。この街はカーニバルのサンバやおしゃれなボサ・ノヴァが生まれたポピュラー音楽のメッカとして広く知られているが、その背景はナポレオン軍のポルトガル侵攻の時代にさかのぼる。

1806年にフランスは、大陸封鎖令によってヨーロッパの諸国がイギリスと通商することを禁じ、ポルトガルもナポレオン軍の侵攻に際して、イギリスへの宣戦布告をフランスから要求された。しかし、もしフランスの要求に応じれば、ブラジルはイギリスの攻撃を受け、ポルトガルは重要な植民地を失い、さらにはイギリスとの緊密な貿易関係を損なうことになる。結局、ポルトガル王室の女王マリーア1世や摂政皇太子ジョアン6世は、およそ1万5000人の随員とともに1807年にイギリス海軍に保護されてリスボンをあとにし、翌1808年にリオに到着したのである。

こうして1万5000人という巨大なエリート集団が熱帯の新世界に、ブラジル王国の都を造ることになった。リオでは独立宣言を行う前から、王立印刷所によって公文書や新聞、図書の発行が始まり、博物館や植物園、公共図書館、王立劇場などが築かれ、文化、政治、経済の中心地としての基盤を整えていたのである。やがてブラガンサ王朝の摂政皇太子が独立を宣言し、ポルトガルの伝統をブラジル風に作りかえながら、ブラジル帝国の発展を目指した。恩恵に浴したのはい部分の特権階級に限られていたけれども、シキーニャのようなリオ市民も、ヨーロッパの高貴で華麗な王室の雰囲気から自らの文化として味わえた。

ペドロ2世の時代になると、音楽がリオ市民を1つにする役目を担った。たとえば、黒人から伝わった踊りルンドゥから生まれたロマンティックな歌曲のモディーニャが、上流階級の館ではピアノによって、貧しい黒人の住いでは、ギターの調べにあわせて歌われた。さらにリオには、政治家や劇作家、詩人などのインテリと貧しい黒人の音楽家たちとの交流の場も存在していた。中心街の憲法広場にある混血の詩人が経営する印刷所などである。20世紀になると、カーニバルのサンバが、リオ市民をまとめることになる。

シキーニャが育ったリオは、このように音楽を通じて、異なった社会層の人が交流し、共存できる街であった。

結婚と出産

シキーニャが13歳になったとき、父親のバジレウ陸軍少佐は、彼女の結婚を考え始めた。それは、ピアノの演奏に浸ることが許された楽しく悩み少なき少女時代への訣別を意味していた。彼女は父親の選んだ、それも、音楽の嫌いな実業家、ジャシント・リベイロ・ド・アマラルと1863年11月5日に結婚した。ちょうどブラジルがパラグアイと戦争を始める2年前のことであった。この不運な結婚が、男性優位のブラジル音楽界で絶大な影響力を誇ることになる女傑シキーニャ誕生のきっかけを与えた。やがて離婚のやむなきに至り、

自立して音楽家の道を選ぶからである。

彼女が 17 歳になった結婚 1 年目の 7 月、彼女は長男ジョアン・グアルベルトを生み、母親となった。結婚 2 年目の 1865 年の 11 月には長女マリーアが生まれた。パラグアイ戦争のため、夫は所有する船を政府に貸与していたが、1866 年には軍隊の輸送を行う目的で、シキーニャとともに戦地へ行くことになる。これによって彼女は、幼い娘マリーアとともにピアノなどの楽器をリオに残し、日常生活から完全に音楽を奪われることになった。1866 年に戦地からリオへ帰還するとき、シキーニャは妊娠に気づき、翌 1867 年に次男イラーリオを生む。しかし、1869 年に離婚することになる夫ジャシントとの関係はすでに冷えきっており、次男は夫の家族に育てられることになった。後にこのイラーリオは靴職人になり、母親シキーニャを慕うことなく、破産して惨めな晩年を送った父親ジャシントの世話をした。娘マリーアはシキーニャの両親が親代わりに育て、シキーニャは面会すら禁じられた。シキーニャが生活を共にできたのは長男ジョアン・グアルベルトのみであった。

(省略)

大衆音楽の解放

1883 年には全国の反奴隷制協会などの集団をすべて結集して「奴隷解放連盟」が創られた。1885 年に政府は、61 歳以上の奴隷を解放する旨の「セクサジェナリオス」法を公布したが、61 歳以上の奴隷には自活の道がほとんど無かったので、ほとんど意味の無い法令であった。

1886 年以降になると、コーヒー農園から周辺の諸都市へ向けて黒人奴隷が集団で逃亡するようになった。そして、1887 年には奴隷人口の割合は全人口の 5% にまで減少していた。この年にペドロ 2 世は病氣療養のため皇女イザベルを摂政として残し、ヨーロッパに向かった。皇女が全奴隷解放令に署名したのは翌 1888 年 5 月 13 日のことであった。

解放令の布告によって、有償の段階的な奴隷解放を求めていたリオ県のコーヒー農園主層は決定的にその経済的基盤を失うことになり、皮肉にも皇女は、自らの手で帝国の支柱を壊す結果を招くことになった。

音楽の世界でシキーニャの評判は高まっていたが、1889 年に特記すべき出来事が起こった。それは、オペラ「グアラニ」の作曲で知られるブラジルの偉大な作曲家かつ指揮者のカルロス・ゴメスがリオを訪れ、このときシキーニャに出会ったことである。カルロス・ゴメスは彼女の才能を認め、そのときから 2 人の交友関係が始まった。ブラジル随一の音楽家の支持により、女性であり、単なる大衆音楽の世界の作曲家であったシキーニャは、音楽家としての決定的な評価を獲得した。黒人の影響を受けた音楽の演奏を公の場では禁じる時代であったからこそ、世界的に知られた作曲家の支持が重要であったのである。この 89 年に、彼女は、大衆音楽の新ジャンルの「存在証明」ともいえるべき「ソ・ノ・ショーロ」を発表した。

この1889年11月15日に陸軍の急進派がデオドロ・ダ・フォンセカ將軍をかつぎだして帝政打倒の革命を行い、ブラジルは共和制に移行した。リオは帝国の都から共和国の首都へと変身する。

1890年に初孫が生まれ、42歳のシキーニャは「おばあちゃん」になった。翌1891年2月に、ブラジル最初の共和国憲法が公布され、デオドロ・ダ・フォンセカが初代大統領に就任するが、議会や海軍と対立して11月に失脚し、副大統領の陸軍元帥フロリアノ・ペイショットが大統領に昇格した。首都リオの政治は混乱を続けていた。

1891年に父親ジョゼー・バジレウ、5年後の1896年には母親ローザ、さらに作曲家カルロス・ゴメスと、シキーニャは相次いで大切な人たちを喪った。

シキーニャは、全奴隷解放11年目の1899年に、マルシャと呼ばれる最初のカーニバルの行進曲「オー・アブレ・アーラス（さあ、隊列をあけろ）」を作曲する。19世紀の中頃、リオの黒人たちはカーニバルのとき、激しいリズムにあわせて、コルダンという男たちだけのグループで街を練り歩くようになった。やがて奴隷解放が進み、リオの街でコルダンの風習が盛んになる。99年にこのコルダンの1つの「ローザ・デ・オウロ」がシキーニャにパレード用の曲を依頼し、誕生したのが「オー・アブレ・アーラス」であった。

この曲は今でも広く演奏されており、黒人の影響を受けたブラジル大衆音楽の解放を象徴する1曲となっている。

52歳のシキーニャはこの1899年、16歳のポルトガル人の若者ジョアン・バティスタに出会う。奇しくも、過去、離婚の後に愛し合い、子供までもうけた鉄道敷設の技師である色男と同じ名前であった。ポルトガル人の若者はシキーニャの熱心なファンであり、やがて息子としての法的な認知をシキーニャとともに彼女の最初の夫ジャシントからも受けるものの、死の瞬間まで、シキーニャのよきパートナー、いわば年下の伴侶として同棲したのである。

後にブラジルを代表する偉大な作曲家となるエイトール・ヴィラ＝ロボスが、国立図書館に勤めていた学者である父ラウル・ヴィラ＝ロボスを亡くし、12歳で街角の演奏家として家族を養うことになるのもこの1899年であった。リオの街はブラジル音楽のメッカとして多くの才能を集めていた。

新しい世紀、新しいリオ

世紀末を越えて新世紀の20世紀を迎えると、若き伴侶ジョアン・バティスタといっしょに、シキーニャは、ヨーロッパへの旅を繰り返した。まず、1902年に初めてヨーロッパを訪れ、1904年には2度目の旅行を行い、このときリスボンにも滞在した。

当時は船の旅であるから、たいへんな時間と気力、そして体力を必要としたであろう。1906年7月にシキーニャは3度目のヨーロッパ旅行のために船に乗った。1906年から1909年までリスボンに住んで、劇のための作曲やコンサートの鑑賞で時を過ごした。シキーニャは還暦を終えて、62歳になっていた。

日本からの最初の移民船笠戸丸がサントス港に到着したのは、シキーニャがリスボンに滞在している 1908 年 6 月のことであった。到着後すぐにサン・パウロのコーヒー農園に向かった日本移民たちが、首都リオの大衆音楽を楽しむのは、2 世や 3 世の時代になってからであった。

シキーニャが 1909 年にポルトガルから帰国すると、リオの都市開発が進んでいた。これは、ロドリゲス・アルヴェス大統領の下で、技術者でもあるリオ市長ペレイラ・パッソスが、リオの街路、港湾設備、さらに公共の建造物の改良と整備を始めていたからである。毎年夏に多くの人命を奪っていた黄熱病も、1906 年に、細菌学者であり市の公衆衛生局長であったオズワルド・クルスの努力によって撲滅された。1908 年には、ブラジル開港 100 周年を祝って大博覧会が開催された。ナポレオン軍に追われてポルトガルから約 1 万 5000 人がリオに逃れてから 100 年が経過していた。オペラやコンサートの公演のための豪華な市立劇場もあらゆる建築資材をヨーロッパから輸入して建築に 4 年をかけて 1909 年に完成した。まさに、新しい世紀における新しいリオの出現であった。

政治の世界では軍人の発言力が増していた。文民支配をとなえる対立候補のルイ・バルボーザを敗り、初代大統領デオドロ・ダ・フォンセカの甥であるリオ・グランデ・ド・スル州出身のエルメス・ダ・フォンセカ元帥が 1910 年に大統領に就任した。軍人大統領の統治下で、皮肉にも軍や地方の反乱、騒乱が相次ぎ、こうした事態に対してフォンセカ大統領は、強力になってきた軍部の力で中央集権化を進めるという「救済の政治」を展開し、地方エリート体制の基盤であったカパンガなどと呼ばれた私兵を徹底的に攻撃した。

不安定な政治の要因が国の経済発展にも悪い影響を及ぼしていた。北部のアマゾンのゴム景気は、プランテーション経営に基づくアジア産のゴムとの競争に敗れ、空前のゴム・ブームははかなく終わった。ところが、リオに自動車ブームが到来した。つまり、アマゾンのゴム景気を支えたのは、タイヤの原料にゴムを求める米国の自動車産業の勃興であったが、リオの街でも車のクラクションの音が聞かれるようになったのである。

それは、シキーニャの新しい音楽活動の始まりに重なった。具体的には、小さな劇場で大衆音楽の演奏を聴かせ、男女の激しい踊りを見せる、コミカルな即興劇のための作曲活動であった。1912 年にブラジルの俗語で「浮かれ遊び」を意味する「フォロボドー」という題名のショーロの名曲を彼女は作り、これが広く演奏された。リオの街は新しい音楽誕生の気分にあふれていた。5 年後に、ブラジルの国民的ポピュラー音楽となるサンバの最初の曲「ペロ・テフォーネ（電話で）」がリオで生まれるのである。

政治スキャンダルと大衆音楽の完全解放

1914 年 7 月に第 1 次世界大戦が勃発した。11 月にエルメス・ダ・フォンセカが任期を終え、ミナス・ジェライス州出身のヴェンセズラウ・ブラスが政権に就くが、この大統領交代の直前に、シキーニャは政治スキャンダルに巻きこまれる。

この年の 11 月はじめに、シキーニャが作曲したブラジルでマシシェと呼ばれるタンゴの

作品「コルタ・ジャカ」を、ナイール・デ・テフェー大統領夫人が、大統領官邸カテテ宮のレセプションでギター演奏することに決めた。大統領夫人は当時、リオのエリートたちにも人気のあった大衆音楽の演奏家のカトゥーロを招いたのである。これに対して、作家でもあるルイ・バルボーザ上院議員が、「大統領官邸のレセプションで「コルタ・ジャカ」があたかもワーグナーの曲に敬意を払うかのように演奏された」と痛烈に批判した。

さて、どこに問題があったのであろうか。まず第1に、この年のカーニバルでマシシエの踊りがリオの枢機卿によって禁じられていた。2つ目は、ギターはいまだエリート層からは、品のよい楽器と認められてはいなかった。第3には、ブラジルの大衆音楽がエリートのサロンで演奏されることは従来ほとんど無かったのである。

結局、政敵であるルイ・バルボーザ上院議員が行った批判に対して、フォンセカ大統領が上院議会でポピュラー音楽を擁護する演説を行ったことで問題は解決した。

この出来事以降、エリートのサロンでも大衆音楽が自由に演奏されるようになった。シキーニャは直接にカテテ宮のトラブルに関わりはしなかったけれども、全奴隷解放法に署名したテレーザ皇女にならって「大衆音楽のテレーザ皇女」と呼ばれるようになった。

戦間期にブラジル劇作家協会（SBAT）を創設

ヴェンセズラウ・ブラス政権下では、第1次世界大戦によって国際貿易が妨げられ、ブラジルの輸出は著しく減少したが、ブラジルは国土を荒廃させることなく戦争が長期化したため、有利な通商上の機会が生じた。そのうえ、工業製品の輸入が途絶えたことから、輸入代替工業化への準備が整った。ブラジルが連合軍の側に立ってドイツに戦線布告するのは1917年になってからである。

ブラジルの国民音楽の地位を獲得することになるサンバは、19世紀末の準備期間を経て20世紀初頭にリオの中心街で生まれ、やがて貧しい人が住む丘の上のファベラや郊外へと広がった。特に大衆音楽界で正統と見なされるサンバは、1917年に、リオの中心街で生まれた。いまだリオの街が、金持ちの館の地区と貧しい黒人の住居を区別し終える前のことであった。プラッサ・オンゼ（第11広場）の近くにある北東部地方のバイーアから移ってきた黒人女性たちの店に、黒人の作曲家のピシンギーニャ（1897～1973年）、ドンガ（1890～1974年）、ジョアン・ダ・バイアーナ（1887～1974年）らが集まり、楽器を演奏したり、曲を作ったりしていた。そのとき生まれた「ペロ・テレフォネ（電話で）」が最初の正統サンバだと言われている。

レコードやラジオが普及する前は劇場での演奏が中心であったが、1917年にはシキーニャの提案で、作曲家や劇作家たちの著作権を擁護するためのブラジル劇作家協会（Sociedade Brasileira de Autores Teatrais）が創設され、サンバやショーロ、タンゴなどの作曲家や作詞家たちの権利が初めて保護されることになった。

一方、リオの都市開発は継続して進められ、1922年のブラジル独立百周年を記念する展覧会場建設のころ頂点に達した。このブラジル独立百周年を記念して建立が計画され、こ

んにち、ブラジルのシンボルとなっているリオのキリスト像は 1931 年に完成した。

おわりに一カーニバルを待ちながら

1930 年代のヴァルガスの独裁体制期に、カーニバルのサンバは国民音楽として手厚く保護され、ブラジルの国民文化の代表と見なされることになった。これによって、リオの大衆音楽のサンバは、ブラジル全土における地位を確かなものにした。音楽文化の都リオでは、シキーニャのように、オペラやクラシックのコンサートを楽しむ同じ人たちが、激しい打楽器のサンバを理解したのである。

シキーニャがこの世に別れを告げた 1935 年 2 月 28 日はカーニバルの直前の木曜日であった。リオのカーニバルは土曜日に始まり、水曜日の日の出とともに終わる。その年のカーニバルでもシキーニャが作曲した有名なカーニバルの行進曲「オー・アブレ・アラス（さあ、隊列をあけろ）」が演奏されたことであろう。大衆音楽の母と呼ばれた彼女の死を悼み、同時に、女性や黒人奴隷、民衆音楽の解放のために闘った勇気ある人生を称えて。

参考文献

- ① Diniz, Edinha. *Chiquinha Gonzaga: uma história de vida*. 10.a tiragem. Rio de Janeiro: Record: Rosados Tempos, 1999.
- ② Lazaroni, Dalva. *Chiquinha Gonzaga: sofreu e chorei, tive muito amor*. Rio de Janeiro: Nova Fronteira, 1999.
- ③ Vianna, Hermano. *O Mistério do Samba*. Rio de Janeiro: Jorge Zahar Ed.:Ed. UFRJ, 1995.
- ④ エルマノ・ヴィアナ（武者小路実昭訳、水野 1 監修）『ミステリー・オブ・サンバ』ブルース・インターアクションズ、2000 年。
- ⑤ クリス・マッガワン、ヒカルド・リカルド・ペサーニャ（武者小路実昭訳、南海弘美訳）『ブラジリアン・サウンド—サンバ、ボサノヴァ、MPB ブラジル音楽のすべて』、シンコー・ミュージック、2000 年。
- ⑥ 金七紀男・住田育法・高橋都彦・富野幹雄共著『ブラジル研究入門—知られざる大國 500 年の軌跡—』晃洋書房、2000 年。

- ⑦ 富野幹雄・住田育法共著『ブラジル—その歴史と経済—』啓文社，1990年。
- ⑧ 富野幹雄・住田育法編著『ブラジル学を学ぶ人のために』世界思想社，2002年。
- ⑨ リオ国立図書館が開設しているシキーニャ・ゴンザーガのページで彼女の代表的な作品のいくつかを聴くことができる。URLは以下のとおり。
- http://catalogos.bn.br/scripts/odwp032k.dll?t=xs&pr=fbn_dig_pr&db=fbn_dig&use=kw_livre&disp=list&sort=off&ss=new&arg=gonzaga&x=11&y=6

※ 住田育法「シキーニャ・ゴンザーガ—ブラジル大衆音楽の母」加藤隆浩・高橋博幸共編著『ラテンアメリカの女性群像—その生の軌跡』（イスパニア叢書11、行路社、2003年12月25日発行）155～168ページより。